

査読論文

矢内原忠雄と中国 — 「国家の理想」 から王明道訪問へ —

松谷 曄介*

論文要旨

日中戦争勃発直後、矢内原忠雄は日本の中国侵略を暗に批判する論文「国家の理想」を発表した。しかし、それはすぐに発禁処分となり、東京大学経済学部教授会においても問題視され、矢内原は東京大学を辞職せざる得なくなった。矢内原の同論文は、日中戦争の勃発が一つの引き金になっていたことは確かだが、日本の中国大陸政策に対する彼の批判的思想は、そのはるか以前より形成されてきたものだった。矢内原は既に学生時代から、日本人の中国人に対する軽蔑的態度を問題視していた。また、満洲事変と満洲建国以後、矢内原は満洲問題・中国問題に本格的に取り組み始め、日本の中国大陸政策に関する論考を相次いで発表した。日中戦争勃発の前年には、「国家の理想」の主張内容を先取りした講演をキリスト教信仰と結びつける形で行っている。したがって、矢内原の「国家の理想」は、彼のそれまでの中国観と中国問題との具体的な取り組みという「知（学問的営為）」と、キリスト教信仰という「信（信仰的営為）」とが結び付けられた形で生み出されたものと位置付けられる。

このように中国問題と深く係わっていた矢内原は、1942年にも中国に渡っている。この訪中の際に、彼は王明道（ワン・ミンタオ）という北京の独立教会の牧師を訪問し、献金をしていた。当時、王明道は日本の宗教政策の一環で結成されつつあった華北中華基督教団に加盟することに抵抗し続けていた。矢内原と王明道は、政治的宗教政策に対する拒絶、神の正義・真理を常に優先させる信仰の姿勢、無教会的独立集会、独自の雑誌発行などの点で多くの共通性を持っていた。また矢内原は以前より、無教会的な中国人の独立的集会を支援することが真の中国伝道である、と考えていた。したがって、矢内原が王明道を訪ねて献金したのは、単なる表敬訪問ではなく、華北中華基督教団への加盟を固辞し、無教会的な独立教会の立場を堅持していた王明道を支持・激励するための、矢内原なりの中国伝道の実践だったと位置付けられよう。ここに、日中戦争・太平洋戦争以後の、彼の「知」と「信」の結合の一端を見ることが出来る。

キーワード

矢内原忠雄 無教会 「国家の理想」 中国 王明道 華北中華基督教団 キリスト教 中国伝道（支那伝道）

* 執筆者：松谷曄介

所属機関：北九州市立大学 社会システム研究科 博士後期課程

連絡先：〒802-8577 福岡県北九州市小倉南区北方4丁目2番1号（北九州市立大学）

E-mail：yosukematsutani@yahoo.co.jp

1. はじめに

1937年8月、矢内原忠雄は、「国家の理想」と題する一文を『中央公論』9月号に寄稿したが、即座に発禁処分となった。それは、日本の中国侵略や国家精神総動員などを暗に指しながら、それらが「国家の理想・国際正義・根本精神に反する」と、哲学的・宗教的視点より批判する内容だった。同年10月、東京帝国大学経済学部長だった土方成美が経済学部教授会の席で「国家の理想」の主張を問題視して矢内原批判を展開し、その結果、矢内原は同年12月、東京帝国大学を辞職せざるを得ない状況に追い込まれた¹。時はあたかも、日本軍が蒋介石政権の首都南京に進攻し、日中戦争が本格化し始めた時期だった。

本稿での筆者の問題意識は、日中戦争を契機に「国家の理想」を著した矢内原がどのような中国観を持っていたか、また「国家の理想」を著した後の矢内原の中国問題との取り組みはどのようなものだったか、そして、中国問題との取り組みは彼の無教会キリスト教信仰とどのように結びついていたか、といった点にある。

そこでまず第一に、「国家の理想」に結実するまでの矢内原の中国との係わりを考察し、彼の中国観の変遷を検証したい。そして第二に、「国家の理想」を著した矢内原が、その後、日中戦争・太平洋戦争の最中、日本の宗教政策に抗して孤軍奮闘していた北京の独立教会の牧師、王明道(ワン・ミンタオ)を訪問したその目的と、その背後にある彼の無教会キリスト教信仰との関係の解明を試みたい。矢内原の王明道訪問は、矢内原の中国観と無教会キリスト教信仰とが結びついた重要な事例だが、管見の限りでは、これまでの先行研究ではまったく取り上げられてこなかった事柄である。

矢内原忠雄の中国観や中国との関係についての先行研究²は、小林文男「矢内原忠雄の中国観—『中国再認識』への志向と日中戦争批判の論理—」(1972)³、同「戦前日本知識人の中国認識—日中戦争をめぐる矢内原忠雄の対応を中心に—」(1982年)⁴、同「日中戦争と矢内原忠雄」(1986年)⁵(いずれも同趣旨)、また田中和男「矢内原忠雄における中国の影」(2001年)⁶が挙げられよう。しかし、いずれの先行研究も、矢内原の中国問題との取り組みの事例として、1942年の訪中を取り上げていない。ましてや、矢内原と王明道との接点については、触れられていない。

その原因を二つ挙げれば、第一に、これらの先行研究においては、彼の無教会キリスト教信仰の要素が差ほど重視されていないか、または信仰と学問が切り離されてしまっていた点にあると言えよう⁷。岡崎滋樹氏は「矢内原忠雄研究の系譜—戦後日本における言説」の中で、戦後の矢内原研究の系譜を「無教会キリスト教信仰の視点から検討したもの」と「無教会キリスト教信仰を除外して検討したもの」の二つに大別している。更に「矢内原研究において彼の『信』と『知』を認識し、また両者の位置づけを正確に捉えることは必須である」と指摘した上で、矢内原の「信」(信仰的営為)と「知」(学問的営為)を統一した新たな研究方法を提唱

している⁸。筆者が本稿で取り上げる矢内原忠雄の王明道訪問はまさに、矢内原の「無教会キリスト教信仰」（「信」）と「中国観および中国問題との取り組み」（「知」）が統一された出来事の一事例と位置付けられよう。

また第二に、日中戦争期における王明道に関する研究自体、当時の日中キリスト教関係史と日本軍の宗教政策に関する研究を踏まえねばならず、これまでの矢内原研究の範疇を越えるものだった、という点も指摘できよう。筆者の専門研究領域は、日中戦争期を中心とした日中キリスト教関係史と日本軍の宗教政策であるため、本論文ではその研究成果を踏まえつつ、矢内原と王明道の関係という事例を解明することにより、矢内原研究に新たな光を当てることにもなろう。

本論に入る前にまず、矢内原と中国の係わりを、彼の訪中と中国関係の論考を中心に時系列的に整理してみよう。以下「★」は主要な歴史事項、①～⑤は彼の訪中回数、「」内は中国に関する論文やエッセーなどのタイトルを示したものである。

★1911年10月10日 辛亥革命（翌年1月中華民国建国）

① 1912年7月18日～8月2日

満洲・朝鮮旅行「第一高等学校興風会主催旅行団」に参加

「一高健児の満洲観」⁹、「満洲の旅（第1回～第27回）」¹⁰

② 1920年10月21日～25日 上海・蘇州（イギリスへの留学渡航途中）¹¹

③ 1924年9月30日～10月29日 朝鮮・満洲調査旅行（一高からの出張命令）

10月19日～25日の間に奉天、撫順、大連。

★1931年9月18日 満洲事変（翌年3月、満洲国建国）

④ 1932年8月26日～9月21日 満洲国視察旅行（一高からの出張命令）¹²

「満洲旅行帰京挨拶」¹³、「匪賊に遭った話」¹⁴

「満洲国承認」¹⁵（『帝国大学新聞』1932年10月10日）、

『満洲問題』¹⁶（岩波書店、1934年）出版

「日満経済ブロック」¹⁷（『婦人之友』第29巻第二号、1935年2月）

「民族精神と日支交渉」¹⁸（『帝国大学新聞』第651号、1936年12月7日）

「民族と平和のために」¹⁹（『通信』40号1937年1月）

「大陸政策の再検討」²⁰（『報知新聞』1937年1月6日～12日連載）

「大陸経営と移植民教育」²¹（『教育』第6巻第1号、1937年1月）

「支那問題の所在」²²（『中央公論』1937年2月）

★1937年7月7日 日中戦争

「国家の理想」（『中央公論』1937年9月）

クリスティー『奉天三十年 上・下』(翻訳, 岩波新書, 1938年)

「支那伝道要綱」²³ (『嘉信』第4巻第3号, 1941年3月)

「大陸と民族」²⁴ (『大陸』1941年12月号)

★1941年12月8日 太平洋戦争

⑤ 1942年7月4日～8月11日 満洲・北支旅行

「満支旅行日記」²⁵ (『嘉信』第5巻第8号, 1942年8月)

2. 矢内原と中国問題－「国家の理想」への思想形成

a) 第一回目の訪中

矢内原の中国との関係は、一高時代の約二週間にわたる満洲旅行にまで遡る。これは「一高興風会」主催による一行二十四名の旅行だった。彼らは、1912年7月18日から8月2日にかけて、大連・旅順・營口・遼陽・長春・哈爾濱（ハルピン）を旅した。この時、矢内原は若干十九歳の青年であり、時代は中国では清王朝に代って中華民国が成立し、日本では明治天皇の死去に伴い大正時代に移り変わる、そのような時期だった。矢内原は帰国後、満洲旅行記を二十七回にわたって『愛媛新報』に寄稿しており、その中に当時の彼の中国観が垣間見える。

矢内原は、当時既に満洲に進出していた多くの日本人が、中国人を「動物的に侮蔑し排斥し、けちくさくこづき廻す」²⁶ような状況を問題視し、次のように述べている²⁷。

[日本人は] かくて子どもに至る迄成り上がり根性とでも言おうか、弱い支那人に対しては「ちゃんこちゃんこ」と頭から馬鹿にしてかかる。此の根性が抜けぬ限り、如何に政府の植民方針が立派であっても、十分の実が揚がらぬ訳である、日本人が未だ大いにえらく無いのだ。日本人の教育が先ず第一だ。五十年百年かかっても日本の国民性から此の島国根性が脱けて、我等が真に大きくなり、支那人に対しても軽蔑の情は憐愍と代らんことを希望する。

矢内原は更に「日本人の活動を見聞するにつけ植民地と経済という問題が非常に興味を喚起してきた。……自分は今後真面目にこれらの問題を研究して見たい」とも述べており、既にこの頃から、日本の海外統治の問題に関心を向け始めていたことが分かる。彼が問題視していたのは、日本人の中国人に対する軽蔑的姿勢だったが、彼自身は「可哀そう」「憐愍（れんびん）」「憐れむべき状態」「気の毒」「愛憐の目を注ぐ」という表現を用いて、その中国人を「憐れむべき隣人」と見なしていた。そして、彼は「憐れむべき」中国に対して、日本が「兄貴分」として導く使命があるとして、次のように述べている²⁸。

満洲の主な住民は勿論支那人である。彼らは甚だ憐れむべき状態にある。……孔子の教えは形骸のみを留め生氣なく、理想なく虚言は公行し、教育は及ばず低き生活をなして居る様は気の毒でならぬ。今では彼らを同等の友人として待遇する事は出来ぬ、少なくとも弟分として愛を以て導いてやりたい。満洲へは日本が手をつけなければ他の国が必ず手をつける。東亜四億の民を救うのは我が国民の重大な責務なるを感ずる…。

このように、当時の矢内原の中国観は、中国を「憐れみ」の対象とし、日本にはその救済義務があるというものだった。中国（満洲）を「同等の友人」ではなく一段劣る「弟分」とし、日本を「兄貴分」と位置付けている点には、若き矢内原の中国に対する日本的優越意識が伺える。しかし、日本の力による支配に対して、彼が若い時期から疑問を投げかけ、「謙遜」な姿勢をも強調していた点は注目に値する。次の一文は、後の「国家の理想」の萌芽を思わせる響きを持っている²⁹。

然し我等は支那人を観たよりも一層よく日本人を観た。その正直にして活気あるところはうれしい、その勇敢にして清い感情のあるのも頼もしい、けれども相対的の島国根性、これが我が国民性より脱し去るまでは我々大国民たるを得ない。国を愛する者は真理を愛する者である。人を愛せず真理を愛せず自己の霊を愛せざる慷慨愛国者が絶えざる間は日本も小さい。軍備よりも真理の重んずべく、政治よりも道德の主なることが一般に認められ、起ちて国政を料理せんとする野心家ばかりでなく、個人の胸に真理を植えんとする謙遜なる人が多くでないまでは、日本の国も開けてはいない。

そして、「個人の胸に真理を植えんとする謙遜なる人」として、彼がこの満洲旅行中に出会った模範的人物として取り上げているのが、遼陽で出会った「ウェストオーター」というイギリス人宣教師である。中国人に対して侮蔑的な日本人とは対照的に、この宣教師は中国人に対して謙遜であり、中国人からも慕われていた、と矢内原は彼を評価し、次のように述べている³⁰。

英国人の宣教師で二十五年も城内に居住し、女学校と病院とを経営して支那人から神様の如く尊ばれているウェストオーターという人がいるが、其の忍耐、其の慈悲心、己を空しくして支那人を愛する者でなければ出来ることではない。日本の宗教家も己をむなしくして人を愛する真諦に入り、リビングストンの様な、又はこのウェストオーター氏の様な献身的な人があらわる様になりたいものだ。

矢内原は後に、満洲をはじめとする日本の海外統治の模範として、奉天で活躍した医療宣教

師クリスティーを高く評価し、1938年には彼の著書『奉天三十年』の翻訳も手がけるが、上記のように、その二十五年前の若かりし時に、既にイギリス人宣教師ウェストーオーターの中に、中国人に対する一つの模範的姿勢を見出していたことが指摘できる。またこのことは、キリスト教と結びついた彼の中国観の萌芽と言えよう。

b) 第二回目、第三回目の訪中

矢内原が、二度目に中国を訪れたのは1920年10月21日から25日であり、それは彼がイギリス留学の途中で上海に寄港し、蘇州にまで足を伸ばした数日間だった。その前年には、ヴェルサイユ条約で山東省におけるドイツ権益が日本に譲渡されたことに対する反対運動や、「対華二十一ヶ条要求」への反対運動を伴った五四運動が起きていた。そのこともあってか、蘇州の「東洋堂」という日本の雑貨商より中国での日貨排斥運動の状況を聞き、矢内原は「なぜ日本人は排斥を受けしやを考えたり」³¹と日記に記している。また、上海の欧米人が長期間に渡って中国に根付いている様子を見聞し、そのような欧米人とは対照的に「日本人は長くて十年多くは三四年の滞在に過ぎず。日本人の海外住居という問題に就いて考ふ」³²と日記に記している。このように、ごく短期間の滞在だったにもかかわらず、中国における反日運動や日本人の進出問題などを考えさせられる経験をしており、このこともまた、矢内原が後に中国問題に取り組む一要因となったと言えよう。

矢内原の三度目の訪中は、1924年9月30日から10月29日にかけての朝鮮・満洲調査旅行の時である。この時、彼は既に一高での教職に就いており、大学からの出張命令での渡航だったと思われる。彼は10月19日から25日の間に奉天、撫順、大連を訪問したが、これらに関して彼自身は特に何も書き残しておらず、その詳細は明らかでない。

c) 第四回目の訪中

より重要と思われる矢内原の中国訪問は、満洲国建国直後の1932年8月26日から9月21日にかけての調査旅行である。これは彼にとって八年ぶりになる四度目の訪中である。同年2月上旬に、関東軍特務部より満洲出張の依頼が矢内原にあったが、即刻電報で断ったと彼自身は回想の中で述べている。したがって、第四回目の訪中は大学からの出張による調査旅行だったと思われる³³。彼は約一ヶ月の間に大連、奉天、新京、哈爾濱（ハルピン）を訪ねている。

この調査旅行中の最大の出来事は、新京から哈爾濱（ハルピン）に向かう途中、矢内原も乗車していた列車が「匪賊」に襲撃されるという事件だった。彼は帰国後に、その当時の緊迫した状況を記した「匪賊に遭った話」と題する一文を、1932年11月の『通信』創刊号に掲載している。同時期に彼が『改造』に寄稿した文章には、「[満洲に匪賊がいるという] 其の事の中に現下の満洲問題の総てが含まれて居るとも言えよう」³⁴とも記されているほど、彼にとっては

非常に衝撃的事件だったようである。彼はこの一事件の中に、満洲問題の本質があることを見て取ったのである。矢内原はその後、立て続けに満洲や中国大陸に関する論考を発表するが、1934年に『満洲問題』という一書をまとめている。匪賊の襲撃を受けるという体験をした四度目の訪中が、その後の彼が満洲や中国大陸に対して大きな関心を寄せるようになった要因の一つと考えられる。

それでは、矢内原は満洲問題の本質どこに見たのだろうか。彼は次のように述べている³⁵。

吾人は満洲問題の性質と帰結の全貌を知る為には、尚満洲国厳然独立国家主義と大日本帝国發展主義との政治的統制に就いて、即ちこの対立物が如何なる政治的形態に於いて止揚せられて行くかに就いて、論じなければならない。

ここで矢内原は、独立国としての満洲国と、帝國的膨張をしていく日本とが「対立物」であると見なしている点が重要である。この問題に関して、彼は別の個所で次のように詳述している³⁶。

満洲国は「独立国」であり、且つ日本と特別な「親善関係」を有するものとして建国せられた。此の「独立性」と「親善性」の性質如何、又両者は如何なる関係に立ちまた今後如何なる方向に發展するかという事に、満洲国の政治的将来は依存している。そもそも満洲人は其の自発的意思によって満洲国を建設し、日本は正義によって之を助けたのであるというのが、満洲事変以来の公の説明である。苟くもこの言明を裏切る如き事実の発生せざる事は、我国家の信義の上から根本的に重要でなければならない。従って満洲国の政治経済工作の主眼は満洲国自体の發達に在るべきものであり、日本が満洲国を利用する事に存してはならない筈である。……之等の問題に就いて満洲人の利益を考慮することは、実に満洲国建国に関する国家的信義の問題であって、之を裏切る政策は日本国の名誉に関することである。

彼が満洲国と日本とを「対立物」と見なしていたのは、一方では満洲国を独立国家としつつも、他方ではその満洲国の權益を我がものにしようとする日本の思惑を見抜いていたからと言えよう。「日本が満洲国を利用してはならない筈である」と彼が強調しているのも、実際には日本が満洲国・満洲人の利益を収奪していたことを看取していたからだろう。彼は敢えて中立的表現として「大日本帝国發展主義」という表現を使用しているが、実際には大日本帝国が侵略的・収奪的な帝国膨張主義であると見なしていたと考えられる。そして、満洲国に匪賊がいるという事実の中にこそ満洲国が満洲国人の利益となっていないことが表われている、と考えたのだろう。彼は、「満洲独立国主義と日本帝国發展主義とは如何なる形態を取って止揚せら

れるであろうか。目前の利益に執着して百年の計を誤ってはならないのである」³⁷とも記しており、当時の現状に警鐘を鳴らしていたことが伺える。

d) 日中戦争勃発前夜の矢内原の中国観

満洲事変と満洲国建国以後の1935年頃になると、日本による華北分離工作や綏遠事件が起こり、日本と中国(国民政府)の緊張が更に高まった。そうになると矢内原は、満洲問題だけに止まらず大陸政策や国民政府との関係問題を論ずる「民族精神と日支交渉」(1936年12月)、「大陸政策の再検討」(1937年1月)、「大陸経営と移植民教育」(1937年1月)、「支那問題の所在」(1937年2月)などの論考を相次いで発表した。1937年1月の日記には、「藤枝丈夫といふ人の『現代支那の根本問題』を求む。支那問題を研究する必要あり、一つやるか。」³⁸と記し、中国問題に対する関心とそれに取り組む強い意欲を見せている。

1936年12月に『帝国大学新聞』に寄稿した「民族精神と日支交渉」は、中国には統一的民族精神がないという主張に対する反論として書かれた。そこで矢内原は、次のように記している³⁹。

支那人には国家思想がないとか、支那には政治的統一国家が有り得ないとか、あたかもただ商利のみ関心を有して愛国心のなきことが支那人の先天的固定的素質であるかの如き認識を有つ者は、社会発展の歴史性についての科学的無智者であって、最大の誤謬に陥れるものと言わねばなるまい。若しもかくの如き非科学的なる認識に基づいて対支政策を遂行せんとする者あらば、その弊害その危険如何ばかりそや。

ここで矢内原は、民族精神を先天的・固定的なものではなく後天的に形成されるものと考えている。彼は民族精神を「現在の政治的思想的実践の中から生まれる」ものとして捉えており、中国には民族的・国家的成長があると認めている。そして同じ理論を日本に当てはめ、日本の現在における国家としての正義や信義を次のように問うている⁴⁰。

大和魂即ち日本民族精神が正義を愛し信義を重んずるものであるや、或いは国家の利益のためには手段を選ばざるものであるや、日本精神は責任を重んじ恥を知るものであるや、或いは裏面工作をたくらんで責任の矢面に立つを回避するものであるや否や等は神話の古典的日本人よりも、寧ろ現在の日本人の行動が日々に之を決定しつつあるのである。

矢内原は「裏面工作」が具体的に何であるかを明示していないが、書かれた時期から推察するならば、華北分離工作などの満洲事変以後の中国に対する諸国策を指して、それらを「国家の利益のためには手段を選ばざるもの」と批判的に捉えていたと考えられる。

これとほぼ同時期の1936年11月14日、矢内原は「民族と平和のために」と題する講演を日本基督教会美竹教会で行い⁴¹、そこでも「我々日本の国民として最も心に斯かる事の一つは、日本と支那との関係」⁴²であるとして、前述の講演「民族精神と日支交渉」と同趣旨の内容を語り、更にはキリスト教的視点をも加味して持論を展開した。彼は「民族の発展」とは、武力や文化の発展ではなく、キリスト者にとっては「神の真理を担い、その栄光を輝かすことである」とし、「時勢の波に乗りまして、軍国主義に便乗する者は、それが資本家であれ、思想家であれ、無産政党であれ、基督教徒であれ、みんな呪わるべきものであります」⁴³と、軍国主義的な民族の発展に対して否定的な見解を示した。このように、日中関係における諸問題を念頭に置いていた彼の民族理解・国家理解の中には、キリスト教的理念・信仰が明確に存在していたことを指摘できる。

その上で、キリスト教の真理と国家の関係を次のように論じている⁴⁴。

次に我々の考えるべきことは、基督教の真理は国家以上であるか、以下であるか。即ち基督教は国家を批判するか否か。左様の問題であります。国家に対して無批判なる基督教は世俗の基督教であります。国家の本質若しくは国家の理想と現実国家との区別する事が出来ない者は聖霊の剣の鋭さを持たないものであります。基督教は勿論国家を認めます。しかし理想の国家、国家らしき国家を認めればこそ現実国家の腐敗を責めるのであります。神の教会、真のエクレシアを認めればこそ、現実教会の弊害を論ずることが出来る様に、理想の国家を認めればこそ現実国家の弊害を指摘する事が出来、またこれを指摘しなければならぬ。我々の信ずる真理は断じて国家以下であってはならない。それは国家を審くべきものであって、国家に審かるべきものではありません。

ここで極めて重要なのは、矢内原が1937年8月に公にして東大辞職にまで追い込まれる要因となった「国家と理想」と同趣旨の主張が、日中関係問題とキリスト教を論じる前年11月の講演の中で、既に先取りされて語られていた点である。彼は更に、後の「国家と理想」でも論じられる「国際正義」という主題に関して、次のように述べている⁴⁵。

しかし増税よりもまだ悪い事があります。それは何かというと正義を蹂躪することです。国内の政治において弱者、大衆、疲困者の権利を奪い、生活を重圧することです。戦争は悪くあります。しかし戦争よりもまだ悪いものがあります。それは国際的正義を蹂躪することです。もしも戦争という手段だけが悪いのであるならば戦争に訴えずして支那から何らかの利益を獲得すればよいのかと言えば、決してそうではありません。戦争に訴えようが訴えまいが、得てはならない利益を得ては、これが正義に反するのであります。我々は問題をば、信仰の根本問題においてつかまなければならぬ。即ち神を

畏れる恐れがあるか無いか。この、民族若しくは国家の利益の為とさえあれば、世界の輿論も軽んずる、国民の輿論をもおさえつける、そうして神様を畏れずして勝手な事を力づくで押し通す。この精神が罪であります。個人が為しても罪であります。国家が為せばなおさら大きな罪であります。これを我々は日本国民の一人として、神の前に悔い改めなければならぬ。人を責めるだけではありません。我々がこれを悔い改める必要があると思います。

このように、矢内原は日中戦争の前年に、たとえ戦争状態でなくとも「得てはならない利益を得ては、これが正義に反する」として、そのことが「国際的正義を蹂躪すること」でもあると論じ、日本の侵略的中国政策を翌年の「国家の理想」に先だって既に批判していたのだった。そして彼は、その国際的正義の問題を「信仰の根本問題」と捉え、即ち「神を畏れずして勝手な事を力づくで押し通す」、そのような罪の問題であると主張するのだった。

矢内原自身が戦後に回想して「私は気をつけて書きましたから、日本の現状を直接に指摘したような言葉はないのです」と述べているように、「国家の理想」の中では、具体的な国名、事件、時期などは一切明記しておらず、文面上は理念的な主張展開となっている。しかし、「民族と平和のために」と題する彼の講演は、彼自身が発行していた『通信』40号(1937年1月)に公にされていたため、同講演を聞いていた者、また読んでいた者にとっては、用語の使われ方などから、「国家の理想」が日中関係問題に関して論じられたものであることは明白だったであろう。彼のそれまでの論文や発言を知る者であれば、「国家の理想」を一読するだけで、彼が日中戦争による中国侵略を「国家の罪悪」と捉えつつそれを執筆したことにすぐに気付いたであろうと思われる。

e) 小括

1937年7月に日中戦争が勃発し、同年8月に「国家の理想」を発表するものの、即座に発禁処分となり、同年12月には東大辞職という結果となった。矢内原が「国家の理想」を著すに至ったのは、日中戦争という一大事件が確かに引き金となっている。しかし「国家の理想」の主張内容は、日中戦争勃発後に彼が新たに考え始めたことでは決していない。ここまで見て来たように、その背景には、学生時代の満洲旅行以来の彼の中国問題との取り組みがあり、彼は早い時期から日本の中国大陸政策に批判的な眼差しを持っていた。特に日中戦争の前年になされた講演「民族と平和のために」の中では、「国家の理想」で展開される主張内容が、キリスト教信仰の視点も踏まえて先取りされている。したがって、「国家の理想」は、中国問題との具体的な取り組みの中で形成された矢内原の中国観と、彼のキリスト教信仰とが結実する形で生み出されたものと位置づけられる。

3. 矢内原の王明道訪問－「国家の理想」以後の訪中の目的

「国家の理想」を著し東大辞職に追い込まれた矢内原のその後の中国との係わりはどのようなものだったのだろうか。彼が東大を辞職した1937年12月後半は、日本軍が南京を占領し大虐殺を行ったとされる時期だったが、彼は1939年11月26日に駿河台女子基督教青年会で行ったイザヤ書に関する講演の中で、そのことを「南京事件」と呼び、次のように語っている⁴⁶。

去る11月3日東京青山にて基督教徒大会〔宣教80年基督教連合信徒大会〕なるものが開かれ、午前には基督教講演があり、午後には文部省宗教局長〔松尾長造〕の講演を聞き、且つ某陸軍大将〔松井石根〕の挨拶があった。……その陸軍大将は南京事件当時の最高指揮官であった。南京陥落の時に、アメリカのミッションで建てている基督教の女学校〔金陵文理女子学院〕に対して、一つの大きな間違いが冒された。そのことが報道されて、外国殊にアメリカの排日的感情に油がそそがれたのである。若しもそういう事実を基督教徒大会の主催者が知らなかったとするならば、之は甚だしき怠慢である。知っていたとするならば、何という厚顔無恥であるか。その事件の責任者たる者は、手をついて基督教会の前に謝らなければならない。基督教徒大会は、日本の基督教徒の名に於いて謝罪を要求すべきではないであろうか。それを全会衆が起立して迎えるとは、之ほど逆さまの事がありますか。……そんな逆さまの事が今日基督教徒大会の名に於いて行われたということを聞くのは、私は目で見た以上になさげなく思いました。

矢内原は、この講演において「南京事件」の虐殺行為とその当時の指揮官だった松井石根を批判し、更には彼を歓迎した基督教徒大会そのものをも痛烈に批判している。矢内原の日中戦争に対する姿勢が、ここにも見受けられる。そして彼は1942年7月4日から8月11日にかけて、中国に渡るのだった。彼にとって五度目の訪中である。彼は帰国後に『嘉信』に「満支旅行記」を記しており、そこでは旅行の目的を次のように記している⁴⁷。

本年一月以来公私の煩勞多く、気が鬱してしまつたので、大きな息抜きを欲した時、丁度満洲に済む旧学生等が一遊を勧めてくれたので、ぶらりと出かける事にした。満十年振りに見る満洲の変化や、始めてみる北支の風物に接するのが楽しみであり、会いたい人も何人かあった。満洲及び北支において伝道の門戸が開かれているか否か、様子を偵察して見ようという下心もあったが、しかしこれという視察又は講演の予定があつたのではなく、至って気楽な休日旅行であつた。

矢内原はかつて華中地域の上海・蘇州を訪問したことがあつたが、華北地域（北支）はその

時が初めてだった。「会いたい人も何人かあった」とあるが、特に『嘉信』の読者や満鉄関係者と多く会った記録が「満支旅行記」には記されている。矢内原は、7月8日に大連に到着し、新京・吉林・哈爾濱(ハルビン)・撫順・天津の各地に滞在し、その後、7月22日に北京入りした。旅行記の冒頭に記された彼の旅行の目的は「至って気楽な休日旅行」とされているものの、「満洲及び北支において伝道の門戸が開かれているか否か、様子を偵察して見ようという下心もあった」とも述べており、彼の中では、キリスト教伝道と結びついた中国問題への関心が意識されていたことがうかがえる。

上記の旅行記には、矢内原の北京での次のような日程が記録されている⁴⁸。

26日 午前は王明道氏の独立教会、午後は天壇、天橋、愛隣館見た。…

27日 …午後王明道氏その他来訪客相次ぐ。

矢内原が訪問した王明道とは、一体どのような人物だったのだろうか。また、矢内原が王明道を訪問した理由は何だったのだろうか。以下では、この矢内原の王明道訪問の理由と、無教会キリスト教信仰と結びついた矢内原の中国との係わりを解明していきたい。



矢内原忠雄(1893-1961)



王明道(1900-1991)

a) 王明道と華北中華基督教団

王明道(1900-1991)は、後の共産党政権下で設立された「三自愛国運動委員会」に参加することを断乎として拒否し、1950年代以降二十年近くの投獄生活を強いられた人物として、中国キリスト教史研究の中では良く知られた存在である⁴⁹。彼は1924年頃から、いずれの教派組織にも属さない独立教会の牧師として伝道活動を始め、1927年には雑誌『靈食季刊』を創刊し、日中戦争期にも教会活動を続けていた。

ここで、矢内原が王明道を訪問した1942年当時の王明道を取り巻く時代状況に、少し触れねばならない。日中戦争が始まった時期から太平洋戦争が始まる以前の時期まで、中国国内においては依然として多くの欧米キリスト教宣教師が活動していた。日本の陸軍は、宗教を統轄する文部省と連携しながら、日本の宗教(仏教やキリスト教)を中国大陸に大量に進出させ、宗教組織を利用して中国人の人心を掌握し、親日世論へと誘導することを企図し、さまざまな宗教工作を行っていた。1938年8月に文部省より各宗教に通達された「対支布教に関する件」⁵⁰の中で、「対支文化工作は我国刻下の最も重要なる国策にして、従って対支布教も事変前取りし方法に拘泥せず、万事新たなる国策の線に沿って計画の樹立及実施を進むるの必要有之」と

記されている通り、一連の宗教工作は「文化工作」として位置づけられていた⁵¹。1939年2月には、華中地域全体の宗教工作を統轄する「中支宗教大同連盟」が上海に設立されたが、同連盟の設立を推進した上海陸軍特務部が1938年10月に起草した「中支宗教工作要領」⁵²では、日本のキリスト教勢力を中国に進出させ、中国民衆の「欧米依存観念の排除」し、「民衆を日本依存に転換せしむ」ことが記されている。つまり、宗教的文化工作上、キリスト教に関しては欧米キリスト教宣教師の勢力が工作上の大きな障害となっていたのだった。特務部では「日本基督教の進出を希望し、之に依て外国人基督教の勢力を駆逐したし」という計画が打ち出されるほどだった。

しかし、外交上の問題もあり、日本軍は欧米キリスト教宣教師勢力を「駆逐」することがなかなかできず、それが達成されたのは太平洋戦争勃発後だった。アメリカを中心とした「敵性国」の大多数の宣教師は集中營に入れられ、あるいは本国に送還され、その結果宣教師の中国教会に対する影響力が大きく削がれた。そこで日本軍当局が打ち出した宗教政策が、中国のキリスト教諸教派を合同させ、欧米キリスト教宣教師に代わって日本人牧師を顧問とした「中華基督教団」を結成させる、というものだった。華中地域では、「南京中華基督教団」や「武漢中華基督教団」といった都市単位の教団結成だったが、華北地域の場合、北京を中心とした華北一帯を網羅する「華北中華基督教団」が結成された。

華北地域では、1942年4月に教会合同の準備を推進する「華北基督教連合促進会」が結成され、同年10月に江長川⁵³を主理、周冠卿を副主理とする「華北中華基督教団」が正式に成立するに至った。北京市内の大半の中国人牧師と教会が同教団に加盟する中、終始一貫して同教団への不参加・非協力を貫き通したのが王明道だった⁵⁴。

b) 矢内原と王明道の接点―守部喜雅氏の証言

矢内原が王明道を訪問したのは、まさに王明道が華北中華基督教団への参加を拒否し続けている時期だった。では矢内原は、一体どのような目的で王明道を訪ねたのだろうか。旅行記にはその詳細が記されていない。

筆者が矢内原と王明道の接点を初めて知ったのは、2008年9月8日に開かれた「中国宣教200年」シンポジウムにおける、守部喜雅氏の講演だった。守部氏は、矢内原と王明道の接点に関して、「日本の牧師が交流を絶っていた占領下にあって、矢内原忠雄と塚本虎二の二人は慰めに来てくれた」という王明道の証言を紹介した⁵⁵。筆者はその後、守部氏にメールでのインタビューを行い、次のような回答を得る事ができた⁵⁶。

王明道先生ご夫妻に初めて、上海のウルクチ路にあるアパートでお会いしたのは、1982年の5月だったと記憶しております。その時、日本から私たちが来たことを知ると、王先生が、メモ用紙に、「この人たちを知っていますか」と、矢内原忠雄と塚本虎二の名を書か

れたのです。そして、二人が、当時、北京で孤立状態にあった王先生を訪ねてくれたことがどれだけ大きな励ましになったかを話してくれたように記憶しています。会話はご夫人が堪能な英語で通訳してくれました。それ以後、三回ほど王先生のお宅を訪問させていただきました。

これは貴重な証言だが、しかし守部氏自身はそれに関する資料や証拠を保持しているわけではなく、あくまで守部氏と王明道との会話に関する記憶の中での証言でしかない⁵⁷。また「慰め」や「励まし」とは、一体どのような内容だったかは明らかでない。したがって、この守部証言の内容を裏付けるためには、更なる検討が必要である。以下では、可能な限りの資料を検討し、矢内原の王明道訪問の内実に迫りたい。

c) 矢内原から王明道への献金

矢内原が、いつ、どのようにして王明道の名を知ったかは定かでないが、彼が既に王明道の存在を知っており、北京に数多く教会がある中で、わざわざ彼の独立教会を訪ねたというのは事実である⁵⁸。守部氏の証言によれば、王明道は矢内原が「慰めに来てくれた」、「大きな励ましになった」と述べていたというが、彼らがどのようなことを語り合ったかは、資料的には確認できない。しかし、矢内原が王明道に献金をしていたことは、次の資料から確認することができる。矢内原が、『嘉信』とは別に発行していた『葡萄』という冊子があるが、そこには彼を支援する「レプタ会」の会員からの寄付金の収支報告が掲載されており、「昭和17年〔1942年〕5月13日～同年11月1日」までの報告には次のような記載が見られる。

本期支出（四口） 370円。

支出内訳	金教臣 ⁵⁹ （京城）	見舞金（3月31日より拘置中）
	志村卯三郎（漢口）	伝道費（漢口第一日本人教会・牧師）
	陸亨理（北京）	伝道費（在支三十年、支那人伝道に従事している ドイツ人でドイツ名ハインリッヒ・リュック）
	王明道（北京）	伝道費（支那人の独立教会）

矢内原の「見舞金」の支出額は、他の場合に15円から20円が平均だった。このことから金教臣の見舞金を20円と想定すれば、他の三口の「伝道費」は平均150円（現在の約5万円）⁶⁰という計算になる。翌日、王明道は北京飯店に滞在していた矢内原をわざわざ訪ねている。それは、矢内原の献金に対する王明道の答礼だったとも考えられる。王明道が自ら矢内原を訪問していたという点から、王明道もまた矢内原を信頼したであろうことは想像に難くない。

d) 矢内原と王明道の信仰的共通点

矢内原が王明道に献金を届けたということは、やはり矢内原が王明道を「励ます」ためだったと考えられるが、彼は王明道のどのような立場に共鳴したのだろうか。

既に述べたように、当時の王明道は、教派を解消して結成される合同教会組織「華北中華基督教団」への参加を固辞していた。王明道は政治的圧力によって合同させられる教会組織は、「我々と異なる信仰に立つ教会で構成されている」ため、「混ぜ物のない信仰を守るには、異なる信仰の諸教会と係るのは問題がある」⁶¹と考えていた。彼は、日本の政治的・軍事的圧力に妥協しつつある占領地域内の中国教会を、次のように批判していた⁶²。

今の教会がとっているやり方は、イスラエルの民がエジプトに下った時に助けを求めたのとそっくりだ⁶³。日本に助けを求める事で、日本にわざわざつけこむチャンスを与えているようなものである。教会の指導者たちは神様のみを見上げ、日本に助けを求めるべきではなかった。事の性質の如何にかかわらず、人に助けを求めたとたん、そのかわりに強要される条件を飲まざるを得なくなる。諸教会の歩み出した道が私の歩む道と根本的に異なっている以上、私に援助できる術はない。

そして、新教団設立の数日前の1942年10月10日、王明道は興亜院華北連絡部文化局に呼び出され、調査官の武田熙と面会し、次のような会話を交わした⁶⁴。

武田：「今月十五日をもって、華北中華基督教団が正式に発足する。日本人も中国人もそろって、君を指導者にと願っているのだがね。」

王：「武田さん、わかっていただきたいことがあります。第一に私は個人的にいかなる団体、組織にも決して所属しないこと。第二に私の牧会する教会はいかなる団体、組織にも決して所属しないこと。この二つです。」

武田：「あなたは非常に強い考えを持っておられる。[しかし]すべての教会が合同することは政府決定事項で、どうしてもこの政策は実行に移されねばならんのだよ。」

王：「私の仕える神に従い、私の信じる真理を堅持するためには、いかなるがあっても、神のみこころを切り裂くような命令に従うわけにはいかないのです。私はすでにどんな代価、犠牲でも払う覚悟ができています。この私の生き方を変えるものは何ともありません。教団への加盟は、私個人にとっても、教会にとっても問題外のことです。」

武田：「頼むからもう一度考え直してくれないか。」

王：「すでにここ数ヶ月、考えに考えました。これ以上考え直すのは無駄というものです。」

このように、王明道にとって、教団合同は神の真理と御心を裏切るものであり、また神の助けではなくして「人の助け」を求めるものであり、「私の歩む道と根本的に異なっている」ものだった。彼は「華北中華基督教団」という名称が、日本で結成された合同教会組織「日本基督教団」に由来していることを察知しており⁶⁵、両教団を同質のものに見なしていたことが分かる。

他方の矢内原の教会合同に対する見解を見ておこう。矢内原自身は、独自の聖書集会を主催する無教会キリスト教の人間であり、教派組織には属していなかったため、日本基督教団の合同が行われた際も、彼の聖書集会が直接その影響を受けることはなかった。しかし、矢内原は彼なりの合同問題に対する見解を持っていた。1941年3月31日『帝国大学新聞』の紙面で、次のように持論を展開している⁶⁶。

宗派合同を、企業合同と同じ手でやられては、たまったものであるまい。宗派は会社でも政党でもないのだから、数を減らすと言うだけの目的で行政官庁が合同させることも無謀だし、その要求に応じて合同するものも見識である。信仰の一致がないのに組織だけ合同したのでは、宗教としての生命は滅びる。その内に再分裂の危機が常に包蔵され、それが外部よりの要求によって為された合同であるだけ一層悪質な内訌が起こるであろう。宗派合同を命ずるよりも、宗派宗団の総解散を命ずる方が、手荒だけれどもまだ合理的である。現在の宗派宗団が全部解散してしまえば、真に生命ある新仏教、若しくは新キリスト教がその後から起こってくるであろう。

矢内原の「信仰の一致がないのに組織だけ合同したのでは、宗教としての生命は滅びる」という立場や、「外部よりの要求」によってなされた合同だけに将来一層問題が大きくなるだろうという見解は、王明道の教会合同に対する見解と軌を一にしている。

このように教団合同に対して否定的見解を書き記した矢内原だったが、同年5月28日に霊南坂教会での「基督教と日本」と題する講演会では、上記の主張と一見矛盾する次のような発言をしている⁶⁷。

この時局に際しまして、日本のキリスト教は種々の形でもって欧米諸国の教会から独立を余儀なくされました。これは多くの不便を伴ったことであるし、また必要の程度を越えたことでもあるでしょうけれども、大体において天の恵みで有ります。……神は日本人のキリスト教を独立せしめて日本人の心に直接の把握をなさしめるために、日本の軍部や日本の政府を用い給うた。

しかしこれは、霊南坂教会の主任牧師が教団合同の中心役を担った一人である小崎道雄だったため、矢内原の小崎に対する一定の配慮ないし遠慮からくる肯定的発言だったと考えられる。実際、矢内原の主張の重点は、教団合同それ自体であるよりも、むしろ別のところにあった⁶⁸。

教会の合同問題というふうな問題は、私は直接関係ありませんけれども、実は小問題であります。どうでもいい事であります。問題は、キリスト教伝道の便宜を得る事を目的とするか即ち利益を目的とするか、キリスト教信仰の真理を維持する事を目的とするか即ち正義を目的とするか。それを決定しなければならない。政治への接近によって伝道の便宜を得るか、或いは政治に道徳的基礎を与える事によってキリスト教の真理を発揮するか。宗教と政治の関係でも、この二つの態度によって大なる差が生ずるのであります。

ここにも「国家の理想」と同様の理念が謳われていることを見て取ることができる。すなわち、政治への接近それ自体の是非よりも、更に重要なことは、その接近によって利益・便宜と正義・真理のどちらを得るのかという点であり、当然のことながら、矢内原の主張は後者、すなわち神の正義と真理を国家や政治の上に置くことだった。このように、矢内原の「キリスト教信仰の真理を維持する事を目的とするか即ち正義を目的とするか」という立場は、王明道の「私の仕える神に従い、私の信じる真理を堅持するためには、いかなることがあっても、神のみこころを切り裂くような命令に従うわけにはいかない」という立場と、非常に共鳴し合うものだったと言えよう。

矢内原と王明道は、思想的な面に止まらず、実際の行動面でもいくつかの共通点を持っていた。前者は、教派教会に属さない無教会として独自の聖書集会を開き、後者もまた教派教会に属さない独立教会として活動していた。また、両者とも戦時中の政治的圧迫にも拘わらず集会を維し続けただけでなく、前者が『嘉信』を、後者が『靈食季刊』を発行し続け、自己の主張を展開していた点も、両者の共通性と言えよう。

e) 「支那伝道要綱」に見られる無教会キリスト者としての中国観

華北中華基督教団は、日中戦争以降の中国占領地域に対する日本の宗教政策の一環として成立したものであったが、これは前述のように、日本当局の「文化工作」の範疇に属するものだった。また同教団は、形式上、中国人の教会組織となっていたが、日本人牧師の村上治（日本基督教団に元所属。当時、北京の日本人教会の牧師）や織田金雄（日本自由メソヂストに元所属。当時、北京の日本人教会の牧師）が同教団の顧問として関わっていた。また中支宗教大同連盟（上海に本部を置く、華中地域の宗教生活を統轄する組織）の理事長だった阿部義宗（日本メソヂスト教会の元監督、日本基督教団成立総会時の議長、日本基督教連盟元理事長）なども、華北中華基督教団団結成の指導者の一人として関与していた。

矢内原は1941年3月に「支那伝道要綱」という簡潔な一文を書いている。そこでは、中国教会に接触していた日本の当時の教会の状況や、実際に中国に進出していた日本人牧師たちの活動、また日本の文化工作を念頭に置きながら、本来のあるべき「中国伝道」を次のように論じている⁶⁹（以下、簡条書きでの筆者要約）。

- ①我が支那伝道は日本臭味のキリスト教の移植を事とすべきでなく、支那人による支那的キリスト教の発達を助くることを以て、真に支那を愛する者の伝道態度となさなければならぬ。
- ②支那伝道は国家的政治的打算を離れて為さなければならない。過去における日本の対支文化事業は概して支那の好感を得る能はざりしは、それがあまりに直接に日本の国家的活動と結びつき、日本帝国主義の一部たる疑惑を以て支那から見られたが故である。同じ理由により、今日の事変に関連して「文化工作」なる語の用いられる事は、甚だ面白くない。伝道が政治的工作の一部として為される時、それは伝道の生命にとりて致命的である。
- ③支那伝道はまた、教会の教勢拡張の目的を以て為さるべきでない。従って、欧米宣教師を駆逐してその地盤を日本のキリスト教会によりて占めんとするが如き、卑劣なる野心を抱いて従事すべきでない [傍点筆者]。またその如き計画に日本のキリスト教会は参加すべきでない。……それ故に支那に教会を起こして自国教会の延長と為し、若しくは勢力下に置かんとする如き教会政治的方法を取らず、支那人自ら相会して聖書研究を為す自由独立なる大小の集会の簇生するよう、援助すべきである。
- ④ついでに言うべきことが二つある。第一は支那に在住する日本人への伝道教化の必要である。彼らは往々にして支那伝道の最大の障害をなすものであり、支那人以上に伝道の必要ある者である。第二は朝鮮及び台湾における日本の政治を改善する必要である。

矢内原がこの一文を著したその翌年（1942年）に結成された華北中華基督教団は、まさにここで言われている「欧米宣教師を駆逐してその地盤を日本のキリスト教会によりて占めん」としていた日本側の「文化工作」であり、「日本臭味のキリスト教の移植」を意図したものであった。また、かつての対支文化事業がそうだったように、華北中華基督教団も「日本帝国主義の一部たる疑惑」を持たれるようなものと、矢内原には感じられたのだろう。このような矢内原の中国伝道論からも、彼が華北中華基督教団に対して非常に否定的見解を持っていたことは、十分に推測できる。

矢内原は「支那伝道要綱」の中で、「支那人自ら相会して聖書研究を為す自由独立なる大小の集会の簇生するよう、援助すべきである」と考えていたが、まさに王明道は、自ら『靈食季刊』を発行し続け、聖書研究や説教を発信しつつ、「自由独立なる集会」を形成していた存在だった。矢内原の言うところの適切な「支那伝道」とは、そのような集会を援助することだった。したがって、矢内原が王明道に渡した献金が「見舞金」ではなく「伝道費」と記録されていたのは、矢内原の王明道訪問自体が、矢内原にとっての「中国伝道」の実践だったと考えられる。

更に、矢内原は「支那伝道要綱」で次のようにも述べている⁷⁰。

以上の所述の如き無教會的聖書研究による愛國的支那キリスト教の發達は、過去の欧米人の支那伝道において最も閑却せられていた方面であると思われる。この意味において眞の支那伝道は我々日本人の手に残されているのである。支那人の中より内村鑑三を起こらしめよ、藤井武を起こらしめよ。これによりて眞に新しき支那の興起を助け得る。[傍点筆者]

王明道は、まさにここで言われている「無教會的聖書研究」をなす存在だった。矢内原は、そのような王明道のあり方の中に「中国の内村鑑三・藤井武」の姿を見たのではなかろうか⁷¹。

f) 小括

以上、政治的宗教政策に対する拒絶、神の正義・真理を常に優先させる信仰的姿勢、無教會的独立集会、独自の雑誌発行など、矢内原と王明道の共通性を明らかにしてきた。それらの共通点の取れんしたところが、華北中華基督教団に対する批判的立場であり、そのことが矢内原と王明道を結び付ける接点となったと言えよう。

また、矢内原にとって王明道はまさに「中国人無教會主義者」と映る存在だった。矢内原は、「無教會的聖書研究」を行う中国人のキリスト教を支援することこそ眞の中国伝道である、と考えていた。したがって、矢内原が王明道を訪ね、「伝道費」の一環として献金したという行為は、単なる表敬訪問でなく、日本の宗教政策を背景とする華北中華基督教団への加盟を固辞し、無教會的な独立教会の立場を堅持していた王明道を支持・激励するための、矢内原なりの中国伝道の実践だったと位置付けられよう。それはまた、矢内原の若き時から「国家の理想」に至るまでに形成されてきた中国観と彼の無教會キリスト教信仰とが結合した行為だったと言える。

おわりに－今後の研究の展望と課題

矢内原忠雄の「信」（信仰的営為）と「知」（学問的営為）を統一的に見る場合、その「知」

はもちろん中国に関する事柄には限定されない。彼の「知」の内容には、その他に、植民地政策や天皇観などさまざまな要素も含まれていると言えよう。

そのことを踏まえうえて、本稿では矢内原の「知」の一部としての彼の中国との係わりを、彼の「信」と関連付けて論じてきた。特に、1942年の矢内原の王明道訪問は、彼のそれまでの中国観と無教会キリスト教信仰が結びつく形で、彼の「中国伝道」が「実践」されたものと言える。矢内原の「知」と「信」の総合の一つである「中国伝道」に関する論考は、既に見てきたように1941年に著した「支那伝道要綱」に詳細に記されている。この一文は、1942年の彼の王明道訪問を位置づける上で重要な意味を持っている。

管見の限りでは、この「支那伝道要綱」が従来の矢内原研究で一部引用されることはあっても、分析対象として取り上げられたことはない。この「支那伝道要綱」を読み解くためには、当時の日本の中国占領地域に対する宗教政策という研究領域との関連付けが欠かせない。このように、矢内原の「知」と「信」に裏付けられた「実践」を解明するためには、他の研究領域の成果が必要となる場合がある。本稿では王明道が矢内原をどのように評価していたかは、資料不足の関係で論じることができなかったが、王明道の日記の手稿(未刊行)が残されており、中国キリスト教史研究の一部である王明道研究が今後より深まり、矢内原との関係が日記から明らかになることにより、本論文の不足部分を補うことができるだろう。また、当時、所謂「支那伝道」に係わっていた他の日本人キリスト者(例えば、阿部義宗や小崎道雄)とのより詳細な比較研究が更になされることで、日中キリスト教関係史研究の中に、新たに矢内原を位置づけることもできるだろう。

更に、今後の新たな研究課題・視点として、矢内原や王明道の事例を踏まえつつ、日本や中国で行われた教派解消による合同教団と無教会集会及び独立教会の相互の比較研究がなされるべきことを提議したい。特に、教派教会に対して合同の政治的圧力が強かったのに対し、何故日本の無教会及び中国の独立教会が最終的には閉鎖・解散させられることなく、日中戦争期にその集会を維持し続けることができたかを、その内的要因と外的要因の両方から検討すべきだろう。本稿で見たように、矢内原や王明道の明確な抵抗の思想・信仰が集会維持を可能とした内的要因と言えよう。しかしそれだけでなく、日本政府及び日本軍がキリスト教政策において懸念していたことは、欧米諸教会と関係を持っている教派教会がスパイ的利敵行為を行うのではないかという「防諜」上の事柄であり、その意味では、海外との関係を持たない無教会や独立教会の集会は、当局にとって泳がせておいても差ほど影響力をもたない程度の許容範囲内の事柄だった、という外的要因も考えられる。この点に関しても、より詳細な資料調査と考察が待たれる。

参考文献

浅野順一『浅野順一著作集』第二巻、創文社、1982年。

- 王明道（渡辺史枝訳）『生命の冠 中国・キリスト教会指導者の闘い』暁書房，1987年。
- 岡崎滋樹「矢内原忠雄研究の系譜― 戦後日本における言説 ―」、『社会システム研究』第24号，立命館大学社会システム研究所，2012年。
- 邢福増「王明道與華北基督教団」、『建道学刊17』建道神学院，2002年。
- 小林文男「矢内原忠雄の中国観―『中国再認識』への志向と日中戦争批判の論理―」、『アジア経済』第13巻2号，アジア経済研究所，1972年。
- ―「戦前日本知識人の中国認識―日中戦争をめぐる矢内原忠雄の対応を中心に―」，阿部洋編『日中関係と文化摩擦』巖南堂書店，1982年。
- ―「日中戦争と矢内原忠雄」，小林文男『中国現代史の断章』谷沢書房，1986年。
- 田中和男「矢内原忠雄における中国の影」，西田毅編『近代日本のアポリアー近代化と自我・ナショナリズムの諸相―』晃洋書房，2001年。
- 原田熊吉「民衆指導工作諸規定送付ノ件」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B02030559500，支那事変関係一件 第十九，昭和13年11月12日作成（外務省外交史料館）。
- 松谷洋介（暁介）「大東亜共栄圏建設と占領下の中国教会合同」、『神学』第69号，東京神学大学，2007年。
- 文部省宗教局長「対支布教に関する件」，陸軍省・外務省・文部省「対支文化協議会に関する件」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B05015007000，東方文化事業関係雑件 第三巻（外務省外交資料館）。
- 矢内原忠雄『矢内原忠雄全集』第2巻，岩波書店，1963年。
- ―『矢内原忠雄全集』第4巻，岩波書店，1963年。
- ―『矢内原忠雄全集』第5巻，岩波書店，1963年。
- ―『矢内原忠雄全集』第12巻，岩波書店，1964年。
- ―『矢内原忠雄全集』第23巻，岩波書店，1965年。
- ―『矢内原忠雄全集』第26巻，岩波書店，1965年。
- ―『矢内原忠雄全集』第27巻，岩波書店，1965年。
- ―『矢内原忠雄全集』第28巻，岩波書店，1965年。
- ―『矢内原忠雄全集』第29巻，岩波書店，1965年。
- ―『嘉信』昭和17年，みすず書房，1967年。
- ―『国家の理想―戦時評論集 キリスト者の信仰Ⅳ』岩波書店，1982年。
- ―『民族と平和―キリスト者の信仰Ⅴ』岩波書店，1982年。
- 『キリスト新聞』（2007年9月22日），キリスト新聞出版社。
- 『基督教世界』（1942年9月10日，9月24日），基督教世界社。

写真出典

矢内原忠雄：<http://homepage.mac.com/abukuma/kate/00/yanaihara.life.html>

王明道：<http://zh.wikipedia.org/wiki/王明道>

註

- 1 矢内原の「国家の理想」執筆とその後の東京帝国大学辞職までの経緯は、大河原礼三編著『矢内原事件50年』（木鐸社、1987年。）に詳しい。
- 2 先行研究に関しては、岡崎滋樹氏（立命館大学経済学研究科経済学専攻博士前期課程 / 國立臺灣師範大學臺灣史研究所）の「矢内原忠雄研究の系譜— 戦後日本における言説 —」（『社会システム研究』第24号、立命館大学社会システム研究所、2012年）から多くの示唆を受けた。
- 3 小林文男「矢内原忠雄の中国観—『中国再認識』への志向と日中戦争批判の論理—」（『アジア経済』第13巻2号、アジア経済研究所、1972年）。
- 4 小林文男「戦前日本知識人の中国認識—日中戦争をめぐる矢内原忠雄の対応を中心に—」、阿部洋編『日中関係と文化摩擦』巖南堂書店、1982年。
- 5 小林文男「日中戦争と矢内原忠雄」、小林文男『中国現代史の断章』谷沢書房、1986年。
- 6 田中和男「矢内原忠雄における中国の影」、西田毅編『近代日本のアポリアー—近代化と自我・ナショナリズムの諸相—』晃洋書房、2001年。
- 7 田中和男氏は「1936年から37年にかけての矢内原は、信仰と学問の間では、明らかに信仰のほうにベクトルが向いていた。……学問から信仰に傾いた矢内原…」と表現しているように、矢内原の信仰と学問を二者択一のものとしている（田中和男、同上、254頁.）。
- 8 岡崎滋樹、前掲論文、254頁。
- 9 矢内原忠雄「感想の種々 —高健児の満洲観（三）」『矢内原忠雄全集』第29巻、岩波書店、1965年、543頁。（以下『全集』）
- 10 矢内原忠雄「満洲の旅（第1回～第27回）」『全集』第27巻、岩波書店、1965年、89～137頁。
- 11 上海・蘇州滞在中の日記『全集』第28巻、岩波書店、1965年、507～508頁。
- 12 1932年2月上旬、関東軍特務部より矢内原忠雄、土方成美、大内兵衛に対して満洲出張の依頼があったが、矢内原は即刻電報で断ったと自身の回想の中で述べている。（「戦の跡」（『嘉信』昭和20年12月、第8巻第12号）、『全集』第26巻、103頁。
- 13 矢内原忠雄「満洲旅行帰京挨拶」『全集』第26巻、岩波書店、1965年、459～461頁。
- 14 矢内原忠雄「匪賊に遭った話」同上、83～90頁。
- 15 矢内原忠雄「満洲国承認」『全集』第5巻、岩波書店、1963年、83～87頁。
- 16 矢内原忠雄「満洲問題」『全集』第2巻、岩波書店、1963年、481～684頁。
- 17 矢内原忠雄「日満経済ブロック」『全集』第5巻、88～93頁。
- 18 矢内原忠雄「民族精神と日支交渉」『国家の理想—戦時評論集 キリスト者の信仰 IV』、岩波書

- 店, 1982年, 332～337頁.
- 19 矢内原忠雄「民族と平和のために」(美竹教会主催, 神田のYWCA 講堂にての講演録), 同上, 322～331頁.
 - 20 矢内原忠雄「大陸政策の再検討」『全集』第5巻, 94～105頁.
 - 21 矢内原忠雄「大陸経営と移植民教育」同上, 106～117頁.
 - 22 矢内原忠雄「支那問題の所在」『全集』第4巻, 岩波書店, 1963年, 326～340頁.
 - 23 矢内原忠雄「支那伝道要綱」『民族と平和－キリスト者の信仰Ⅴ』岩波書店, 1982年, 160～163頁.
 - 24 矢内原忠雄「大陸と民族」『全集』第5巻, 118～124頁.
 - 25 矢内原忠雄「満支旅行日記」『全集』第23巻, 岩波書店, 1965年, 330～334.
 - 26 矢内原忠雄「感想の種々 一高健児の満洲観(三)」『全集』第29巻, 543頁.
 - 27 矢内原忠雄「満洲の旅」『全集』第27巻, 97頁.
 - 28 矢内原忠雄, 同上, 134頁.
 - 29 矢内原忠雄, 同上, 136頁.
 - 30 矢内原忠雄, 同上, 115頁.
 - 31 矢内原忠雄「日記」大正9年9月22日, 『全集』第28巻, 507頁.
 - 32 矢内原忠雄「日記」大正9年9月24日, 同上, 508頁.
 - 33 矢内原忠雄「戦の跡」(『嘉信』昭和20年12月, 第8巻第12号), 『全集』第26巻, 103頁.
 - 34 矢内原忠雄「満洲見聞談」『全集』第2巻, 658頁.
 - 35 矢内原忠雄「満洲問題」同上, 598頁.
 - 36 矢内原忠雄「満洲国の展望」同上, 680～681頁.
 - 37 矢内原忠雄, 同上, 682頁.
 - 38 矢内原忠雄「日記」昭和12年1月5日, 『全集』第28巻, 729頁.
 - 39 矢内原忠雄「民族精神と日支交渉」, 前掲, 335頁.
 - 40 矢内原忠雄, 同上, 337頁.
 - 41 この日, 矢内原の講演の前に, 美竹教会の主任牧師だった浅野順一が, 「聖書と民族」と題する講演を行っており, 次のように述べている。「斯かる少数者の信仰が新約聖書に於ける教会の思想となり, 基督者は一方に於て忠良なる国民であると共に, 他方に於て国家の歩みを厳正に批判すべき良心としての任務を与えられている。我々の永遠なる住家は, 地上の国家ではなくして, 神の国の住民たることにある(ピリピ書3:20, ヘブル書11:16)。斯かる意識が我々をして国家の中にあり乍ら同時に国家を超越せしむる確信を与えてくれるものである。この事は我々基督者をして国家に対して冷淡とならしむるものに非ずして却って真の意味に於て国家を愛せしむる動機となるものである。……国家は重い, 然し乍ら真理は更に重い。愛する祖国は真理に照らされて国家百年の計を正しく建て, 又これを誤りなく行ふべきであらう。」(浅野

- 順一『浅野順一著作集』第二巻，創文社，1982年，146頁～147頁，149頁。) このように，彼の主張内容は，その後に展開された矢内原の講演内容とも相通ずるものだったことが見て取れる。
- 42 矢内原忠雄「民族と平和のために」，前掲，322頁。
- 43 矢内原忠雄，同上，326頁。
- 44 矢内原忠雄，同上，327頁。
- 45 矢内原忠雄，同上，328頁。
- 46 矢内原忠雄「第二イザヤ書講義」『全集』第12巻，岩波書店，1964年，577頁。
- 47 矢内原忠雄「満支旅行日記」『嘉信』昭和17年，みすず書房，1967年，198頁。この他に，矢内原自身が中国旅行について言及しているのは，1942年12月6日に東京赤坂三会堂で語った「基督教の主張と反省」(『嘉信』第5巻第12号，1942年12月，『国家の理想－戦時評論集』474頁。)が挙げられる。
- 48 矢内原忠雄，同上，200頁。
- 49 王明道については，以下の文献を参照。王明道(渡辺史枝訳)『生命の冠 中国・キリスト教会指導者の闘い』暁書房，1987年。呉利明『基督教與中国社会変遷』基督教文芸出版社，1981年。
- 50 文部省宗教局長「対支布教に関する件」，陸軍省・外務省・文部省「対支文化協議会に関する件」JACAR(アジア歴史資料センター) Ref. B05015007000，東方文化事業関係雑件 第三巻(外務省外交資料館)所収。
- 51 1938年8月に文部省より各宗教に通達された「対支布教に関する件」の中では，「対支文化工作は我国刻下の最も重要なる国策にして，従って対支布教も事変前取りし方法に拘泥せず，万事新たなる国策の線に沿いて計画の樹立及実施を進むるの必要有之」と記されている。
- 52 原田熊吉「民衆指導工作諸規定送付ノ件」JACAR(アジア歴史資料センター) Ref. B02030559500，支那事変関係一件 第十九，昭和13年11月12日作成(外務省外交史料館)。
- 53 江長川(英語名: K.Z.Kuang)は，中国のメソヂスト教会の監督であり，蒋介石と宋美齡の結婚式の司式をしたことでも知られている。彼は，共産党政権成立後には三自愛国運動委員会の副主席をも努めている。
- 54 華北中華基督教団をはじめとする日中戦争期の中国の教会合同の諸問題については，拙論「大東亜共栄圏建設と占領下の中国教会合同」『神学』(東京神学大学出版，69号，2007年，140～165頁)を参照。王明道と華北中華基督教団の関係については，邢福増「王明道與華北基督教団」(『建道学刊17』建道神学院，2002年)，また宋軍「従抗戦時期華北日軍対基督教政策的の演變觀華北中華基督教団の成立」，李金強，劉義章主編『烈火中の洗禮——抗日戦争时期的中國教會(1937-1945)』(建道神学院，2011年)を参照。
- 55 『キリスト新聞』2007年9月22日。
- 56 筆者からの2011年9月30日付けのインタビュー・メールに対する守部喜雅氏の2011年10月2日付けの回答メール。

- 57 守部氏の証言によると、王明道は矢内原忠雄と塚本虎二の二名の名前を挙げたと言うが、塚本が矢内原に同行していた記録は、管見の限りでは確認することができない。塚本が毎月発行していた雑誌『聖書知識』の彼の日記的記録「雑感雑録」によれば、1942年7月と8月の期間、塚本は日本におり、太平洋戦争勃発以後に中国に行った記録はない。塚本が王明道を訪ねたとすれば、それ以前の時期となるが、その時期を筆者はまだ特定できていない。また次のような可能性も考えられる。塚本虎二ではなく類似した名前の「牧野虎次」（同志社大学）だったとすれば、牧野は日本基督教教育同盟からの派遣で、1942年8月18日から約三週間の旅程で、上海・南京・天津・北京・青島を訪ね、汪精衛政権の要人や日本大使館関係者、日本軍要人、キリスト教関係者と会談していた記録がある（『基督教世界』1942年9月10日、9月24日を参照）。したがって牧野が王明道を訪ねたとすれば、牧野の北京滞在の8月30日以降の数日間の期間だったと考えられる。矢内原が王明道を訪ねた数週間後であるため、王明道の記憶の中に矢内原と牧野の二人の名前が記憶に残ったという可能性も考えられる。
- 58 矢内原は、王明道訪問の前日に北京の日本人 YMCA の座談会に出席している。そこでは、北京で活動していた日本人牧師たちと懇談し、中国人に対する伝道に関して意見交換をしたようである（「キリスト教の主張と反省」『国家の理想－戦時評論集 キリスト者の信仰 IV』、前掲、474頁。）。座談会に出席した日本人牧師が誰だったかは定かでないが、彼らから華北中華基督教団への加盟を固辞していた王明道のことを聞き、その翌日に訪問したとも推測できる。
- 59 金教臣（キムギョスン）と矢内原の関係については、飯沼次郎・韓智曠『日本帝国主義下の朝鮮伝道』（日本基督教団出版局、1985）、に所収されている「矢内原忠雄と金教臣」（217頁～222頁）を参照。また金教臣を研究対象としたものとして、新堀邦司『金教臣の信仰と抵抗－韓国無教会主義者の戦いの生涯』（新教出版社、2004年）が挙げられる。
- 60 企業物価戦前基準指数の計算：668.4（2009年）÷1.912（1942年）≒350×150円＝52500円。
日本銀行ホームページ参照（<http://www.boj.or.jp/announcements/education/oshiete/history/11100021.htm/>）
- 61 王明道、前掲書、219頁。
- 62 王明道、同上、212頁。
- 63 旧約聖書の中で、イスラエルの民がエジプトに移った後に、やがてエジプトの奴隷となってしまったことを指している。旧約聖書の創世記と出エジプト記を参照。
- 64 王明道、前掲書、226～227頁。
- 65 王明道、同上、224頁。
- 66 矢内原忠雄「科学する心」『全集』29巻、前掲、579頁。
- 67 矢内原忠雄「基督教と日本」『国家の理想－戦時評論集 キリスト者の信仰 IV』、前掲、437～438頁。
- 68 矢内原忠雄、同上、439頁。

- 69 矢内原忠雄「支那伝道要綱」『民族と平和－キリスト者の信仰Ⅴ』、前掲、160～163頁。
- 70 矢内原忠雄、同上、162～163頁。
- 71 田中良一氏は、「救済としての植民?：矢内原忠雄における伝道の植民政策学」（『関連社会科学』第21号、東京大学、東京大学大学院総合文化研究科相関社会科学専攻、2012年）において、矢内原の「支那伝道要綱」中の「真の支那伝道は我々日本人の手に残されている」という一文に言及し、「『愛国的支那基督教』の発達は、西洋による伝道ではなく、あくまで日本人の伝道によって生ずるべきものと矢内原は考えたのである。……矢内原は日本人こそがアジア植民地への伝道者にふさわしいことを信じて疑わなかったのである。同化主義に批判的であり、植民地のナショナリズムに共感しつつも、植民地帝国日本の膨張と共振してしまう矢内原の姿が、ここに示されているといえよう。」と述べている。しかし、矢内原の「支那伝道要綱」は、まさに「植民地帝国日本の膨張と共振してしまう」ような、日本のキリスト教会の当時の「支那伝道」（華北中華基督教団や中支宗教大同連盟などへの関与）を批判していたのであり、前述の一文からは、「矢内原は日本人こそがアジア植民地への伝道者にふさわしいことを信じて疑わなかった」とは言えないのではなからうか。

Yanaihara Tadao and China: His Article, “The Ideal of the Nation” and His Visit to Wang Mingdao

MATSUTANI Yosuke *

Abstract

Right after the Sino-Japanese war broke out, Yanaihara Tadao wrote an article “The ideal of the nation”, in which he implicitly criticized Japan’s invasion to China. The article was banned soon, and he was criticized at the Tokyo Imperial University. Then he was forced to resign his position at the university. Although his motive to write such an article was promoted by the breaking out of the war, his critical idea about Japan’s China policy was formed from much earlier time. In his college student time, he was already critical about the Japanese people’s attitude toward Chinese people. After the Manchuria incident, he eagerly started to study and analyze the China issues and published many articles about such issues. A year before the war, he made a speech which insisted the similar content of “The ideal of the nation”, related with his Christian faith. Therefore, “The ideal of the nation” should be regarded as the unity of his academic ideas and his Christian faith.

In 1942, Yanaihara visited China even in the midst of the wartime. While he was in Beijing, he visited a Chinese pastor of an independent church, Wang Mingdao. Yanaihara gave some money to him as a donation. At that time, Wang was refusing to join “United church of Christ in North China”, which was organized according to Japan’s religious policy. Both Yanaihara and Wang had many common ideas, such as refusal of political religious policy, priority of the God’s justice and truth, non-church style independent congregation, publishing own Christian magazine, etc. Yanaihara’s idea of “China mission” is to help Chinese non-church style congregation. Therefore, Yanaihara’s visit to Wang, giving him some donation and encouraging him, was the practice of his China mission idea. This also can be regarded as one of the examples of the unity of his academic ideas and his non-church Christian faith during the wartime.

Keywords

Yanaihara Tadao, Non-church Movement, “The Ideal of the Nation”, China, Wang Mingdao, United Church of Christ in North China, Christianity, China Mission

* Correspondence to : MATSUTANI Yosuke
Graduate student, Ph.D. Course, Kitakyushu University
4-2-1 Kitagata, Kokuraminami, Kitakyushu-city, Fukuoka, 802-8577
E-mail : yosukematsutani@yahoo.co.jp

